

## 「言語少年」と東方通詞

柏 木 治

「言語少年（青年）」という表現（*enfants de langues*あるいは*jeunes de langues*）を知っている一般フランス人はいまではほとんどいない<sup>1)</sup>。これに相当するイタリア語やドイツ語の *giovani di lingua* や *Sprachknabe* という言い方も、専門家を除いてほとんど知られていないのではないかと想像される<sup>2)</sup>。しかし、言語少年（青年）の存在は、19世紀にはまだ、一部の人びとには特異な印象を残しつつ、しっかりと歴史のなかに足跡を刻んでいた。ナポレオン研究で知られた歴史家でアカデミー・フランセーズ会員でもあったフレデリック・マソン（Frédéric Masson 1847-1923）は、19世紀末、自著『往時』*Jadis* に収められることになる一文のなかでこの少年たちのことを懐かしく回想している。

同級生よりもたくましく、年上で、くすんだ顔色をした外国人風情、そして奇妙な喋り口の何人かが教室の長椅子に座る光景を憶えていな

- 
- 1) ある研究者は、「*enfants / jeunes de langues*」という表現と「*drogman*」の語について「*ces termes anachroniques*」と形容していて、現代のフランス人もほとんどこの表現には馴染みがないようだ。Cf. Marie et Antoine Gautier, « La Première promotion des jeunes de langues », *Bulletin de l'association des anciens élèves de l'INALCO*, 1992, p. 7. この論文は、のちに同じ著者によってイスタンブルから出版された以下の書籍に収められている。*Drogmans et Diplomates européens auprès de la Porte ottomane*, Les Éditions Isis, Istanbul, 2003, p. 47.
  - 2) ヴェネツィア共和国は1551年にコンスタンチノーブルに東方語通訳養成のための学校を開き、その生徒を *giovani di lingua* と呼び、ドイツ語でも同様に *Sprachknabe* と呼ばれていた。

いは、われわれと同年代か先輩のルイ=ル=グラン校生あるいはサント=バルブ学寮生ではひとりもない。かれらは居心地が悪そうだった。ときどきラテン語の説明の最中に学監に呼ばれると、突然いなくなった。仲間まじわることもなく、かれらだけで生活し、自分たちだけになったと思うと、不思議な言葉でわけのわからない話をしていった。他の子どもたちが黒い大壁の監獄から脱出して外の空気と家族と自由を見いだせる待望の日、かれらはいちだんと孤独の身を感じ、陰気な監督係の監視のもと、じわじわとやってくる退屈と遠く離れた陽光あふれる国への未練を引きずりながら、パリの周辺を歩くのであった。かれらが呼ばれるその名前いたるまで、なにかもが特別の好奇心と一種の尊敬とを呼び起こした。

かれらは「言語青年」(jeunes de langues) と呼ばれていた<sup>3)</sup>。

ここに言われる「言語少年(青年)」とは、東方諸国を相手に通訳業務にあたらせる目的で語学養成されていた若年の学徒を指す。さらに、こうした経験を経て通訳となったものを *drogman* (東方通詞) と呼んでいった<sup>4)</sup>。17世紀以来、ヨーロッパにとっての東方、すなわちイスラーム世界は、ときに脅威となりつつも重要な経済活動の相手であり、また異国趣味的情趣の源泉でありつづけた。いうまでもなく、その両世界の接触の「現場」に従事する人間はつねにいたのであり、まさにそこで重要な役割を担ったのが、いまではほとんど言及されることのない「言語少年」たちである。両世界の関係をうまく保つことはヨーロッパ各国にとって必要不可欠の条件であり、こうした通訳養成は16世紀以降、フランスに限らず、イタリアやオーストリアでもおこなわれていた。かれら通詞は、

3) Frédéric Masson, « Les jeunes de langues. Notes sur l'éducation dans un établissement de jésuites au XVIIe siècle », in *Jadis*, Paul Ollendorff, 1905, pp. 67-68.

4) アルメニア語の *tercüman* がアラビア語およびトルコ語を経てイタリア語の *dragomanno* となり、これがフランス語に入って *drogman*, *truchement* という語になった。

ふたつの世界の政治的・文化的接触の現場に身を置くきわめて重要な存在であった。

ヨーロッパとイスラーム世界との関係史は、文学史においても政治思想史においてもきわめて重要なトピクスである。われわれは、ヨーロッパ人のイスラーム体験を、たとえば文学者たちの東方旅行記から知る。そして、その記述をよりどころとしながらエキゾティシズムやヨーロッパ中心主義、あるいはヨーロッパ人による専制主義的政治体制批判や植民地イデオロギーなどを論じる。しかし、トルコ語もアラビア語もペルシャ語も知らないこれらの文人に、現地の情報源となっていたのはまさに通詞たちであり、その情報が旅行記の随所に昇華されたかたちとなって記述されたのだとすれば、その存在を軽視してはならないだろう。あとでみるように、通詞たちは現代人が想像する以上に現場判断を任されており、それゆえその任務は責任の重い、したがって過酷なものであった。

本稿では、こんにちほとんど忘れ去られたこの「言語少年」に焦点を絞りながら、いくつかの資料をもとに、フランス17世紀から18世紀にかけての通詞たちの生活に照明をあててみたい。

## 1. 言語少年（青年）学校

フランス近代における東洋学の組織的研究は、革命期にさまざまな教育研究機関が再編成されたことに端を発する。もちろん、ルネサンス以降、ギヨーム・ポステルらにはじまる東方語研究の伝統はあったが、18世紀後半のフランスでは、ほとんどその灯が消えかけていたといえる。「1696年から1779年まで、たった一行さえアラビア文字で印刷されることはなかったという事実」<sup>5)</sup>からも、18世紀をつうじてフランスの東洋研究を見舞っていた凋落傾向は確認できよう。この状況は、近隣諸国と比較しても顕著であった。これは、いくつかの同時代資料にもあきら

---

5) Auguste Carrière, *Notice historique sur l'école spéciale des langues orientales vivantes*, Ernest Leroux, 1883, p. 3.

かである。

東洋の文芸は、イギリス、ドイツ、オランダ、さらにその他の国でもではいぶん大事に育てられているのに、フランスではひどく無視されている。その理由は簡単だ。これら他国では、東洋語の知識を獲得すれば名誉ある地位、給料のよい職業が得られるのに、フランスでは同じ知識をもっているでもせいぜいコレージュ・ロワイヤルの教授職、国立図書館の通訳職、あるいは、母国を遠く離れて、やっと生活できる程度の下級の地位で細々と一生を終えることにしかない<sup>6)</sup>。

こうした事情は、他の資料にも繰り返し報告されている。

ずっと以前からウィーンでは東洋語を学ぶ生徒の教育機関がある。われわれの国の機関よりもずっと多くの数の、すぐれた資質をもつ通訳を生みだしてきた。その理由は、ドイツ人がこの職業に与えている敬意にある。かれら通訳は、すばらしい地位に昇りつめ、しばしばコンスタンチノーブルの公使や大臣の書記官職につく。ヴェネツィア共和国でも、通訳にはつねに多大な優遇措置がとられたから、同様の利益がある。ロシアでも同じやりかたで同様の結果を生んでいる。政治・通商関係がそれほど重要でないその他の国々においては、その [現地

---

6) « Nécessité d'encourager en France l'étude des Langues Orientales; Moyen sûr et facile d'y parvenir; Avantage réel qui en résulteroient pour nos relations politiques et commerciales avec les peuples Musulmans en Europe, en Afrique, en Asie », in Henri Cordier, *Un interprète de Général Brune et la fin de l'École des jeunes de langues*, in *Mémoires de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, t. XXXIII, 2e partie, Imprimerie nationale, 1911, p. 283. なお、コレージュ・ロワイヤルとはコレージュ・ド・フランスの旧称。コレージュ・ド・フランスとなったのは1870年で、この文章からみてもわかるとおり、18世紀においてはこの教授職も、名誉、報酬ともに、こんにちのそれには遠く及ばなかった。

の] 国で生まれた人間を通訳に雇う。国家は高い給料と家族への厚遇によってかれらを激励するが、所詮仕える国の外部の人間であるから、ますます信頼は薄れていく<sup>7)</sup>。

このような状況のなか、国立東洋語学校の創設を進言したのはルイ・ラングレス (Louis Langlès 1763-1824) であった。1790年、国民公会において東洋語の重要性について の意見陳述を行い (« De l'importance des langues orientales pour l'extension du commerce, les progrès des lettres et des sciences »)、アラビア語、トルコ語、ペルシャ語の講座をパリとマルセイユに設けるよう説いた。このときはほとんど相手にされなかったが、1792年、ラングレスが国立図書館手稿部副監督官に任ぜられると、公教育委員会委員長であったジョゼフ・ラカナル (Joseph Lakanal 1762-1845) と知り合い、ラングレスの意が採り入れられた。共和暦3年芽月10日 (1795年3月30日) に国民公会が発した政令によって、こんにちの国立東洋語学校の母体ができることになる<sup>8)</sup>。

---

7) « Mémoire pour les Affaires étrangères sur les Enfants de langues destinés à servir de drogmans ou interprètes dans les Échelles de Turquie », in Henri Cordier, *op. cit.*, p. 289.

8) この時の政令は以下のとおり。Article premier. Il sera établi, dans l'enceinte de la Bibliothèque nationale, une école publique destinée à l'enseignement des langues orientales vivantes d'une utilité reconnue pour la politique et le commerce. / Art. 2. L'École des Langues orientales sera composée : 1o d'un professeur d'arabe littéraire et vulgaire ; 2o d'un professeur pour le turc et le tartare de Crimée ; 3o d'un professeur pour le persan et le malais. / Art. 3. Les professeurs feront connaître à leurs élèves les rapports politiques et commerciaux qu'ont avec la République les peuples qui parlent les langues qu'ils sont chargés d'enseigner. / Art. 4. Lesdits professeurs composeront en français la grammaire des langues qu'ils enseignent. Ces divers ouvrages seront remis au Comité d'instruction publique. / Art. 5. Le mode de nomination et le salaire des professeurs de langues orientales seront les mêmes que ceux des professeurs des écoles centrales instituées par la loi du 7 ventôse dernier. /

しかし、これよりも約2世紀前、ルイ14世治下、1669年にコルベールの呼びかけによって創設された「言語少年学校」(École des Jeunes de Langues)なるものがあった。この学校については、前述の国立東洋語学校設立に絡めて挿話的にしか語られず、しかも不正確な記述も少なくない。若干立ち入ってその実態を記しておくことは、必ずしも無益なことではないだろう。

17世紀当時の商人たちは、現地人通訳を介さずに商取引できる環境を強く求めており、この要請をうけて財務総監であったコルベールがとくにレヴァント地域の言語通訳の養成機関としてこの学校を計画した。そしてこの学校の生徒を「言語少年(青年)」(enfant [jeune] de langue)と呼んだのである。ちょうどオリエント地方にフランスの影響力を増大させたいと切望していた時代の時代であり、そのためにマルセイユを外国船が出入りできる自由港とし、多くの外国人商人を引きつける政策もとられた。1669年11月18日の法令によって、フランス生まれの9歳と10歳の少年6名がコンスタンチノーブル(ペラ)とイズミルのカプチン修

---

Art. 6 Le Comité d'instruction pulique demeure chargé du règlement de police de l'École des langues orientales.

ここで「東洋語」としてあがっているのは、第2条にあるとおり、アラビア語、トルコ語とクリミア地方のタタール語、そしてベルシャ語とマレー語である。第1条に明確に謳われているように、「東洋語」の重要性もしくは有用性は、政治的商業的な理由によってのみ計られたものであって、少なくともラングレスが1790年に行った意見陳述の表題にあった文芸や学問の進歩という表現はどこにも見あたらない。18世紀以前、この見地からフランスにとって重要な東洋語はまさにこれらの言語だけだったのである。ちなみに、19世紀になってそれ以外の東洋語講座が順次設けられていくが、かれらからみて極東に位置する国々の言語は、ずいぶん遅かった。中東諸語のあと、中国語の講座開設がようやく1843年、日本語はさらに遅れて1868年のことである。東洋語学校での中国語と日本語の開設と歴史事情については *Cent-cinquantenaire de l'École des langues orientales. Histoire, organisation et enseignements de l'École nationale des langues orientales vivantes*. Imprimerie nationale de France, 1948, pp. 129-161, 177-193を参照。

道院に送られ、そこで3年間、レヴァントおよびバルバリ地方（北アフリカ北部地域）の寄港地<sup>9)</sup>で、在オスマン・トルコ領事館の通詞としての任務に就くべく東洋語を学ぶことになった。

この決定では毎年6名のはずであったが、翌年の10月31日の規定によれば、3年ごとに空席を埋めるように任命すればよいことになっている。実際、同年11月1日に、コルベールは、外交官で当時大使としてコンスタンチノーブルにあったノワンテル侯爵（Charles Marie François Olier, marquis de Nointel 1635-1685）にあらたな決定を書き送っている。

今後、コンスタンチノーブルに居住するレヴァント地域寄港地の通詞・通訳官は、もし国籍においてフランス人でないならば、かれらの仕事の役割を負うことはできない。[中略] 3年ごとに、みずからそこに行くことを望んだ9歳から10歳までの6名の少年がコンスタンチノーブルとイズミルの港に送られ、カプチン修道院に身を置いて、そこで養育されるとともに、ローマ教皇のカトリック教と言語の知識を同時に教え込まれて、やがてそれらの言語の通訳として使えるようにする<sup>10)</sup>。

ノワンテルがコンスタンチノーブルに到着したとき、まさに6人の言語少年がカプチン修道会のもと、トルコ人家庭教師（*Khodja*）についていた<sup>11)</sup>。

ところで、ルイ14世とコルベールの目的は何だったのだろうか。もち

---

9) これらのオスマン・トルコの港湾都市では、フランス人商人には治外法権の特権が認められていた。というも、1536にフランソワ1世とスレイマン1世とのあいだで最初に結ばれた、いわゆる特許協約 *Capitulations* がその後も改定されつつ効力を保ち続けていたからである。この協約には、領事裁判権や租税免除などが含まれ、これらの地域でのフランス人商人の自由な商業活動を保障していた。

10) Henri Cordier, *op. cit.*, p. 270.

11) Cf. *Journal d'Antoine Galland pendant son séjour à Constantinople (1672-1673)*, publié et annoté par Charles Schefer, Ernest Leroux, 1881, t. I, p. XI.

ろん上述したように、レヴァント地方での商業活動をより円滑に遂行できるように環境を整えることが急務であり、そのために有能な人材を養成し、この地域での通商上の影響力を強めることに主たる目的があったことは事実だが、太陽王の意図にはさらに大きな野心も見え隠れする。いわゆる「フォンテーヌブローの勅令」(1685)によってナントの勅令を破棄したことで知られるこの絶対君主は、きわめてカトリックの教義に忠実であった。キリスト教の聖地、しかも長らくイスラーム教の勢力に支配されたこの中東地域に何らかの政治的覇権を築きたいという思いもどこかにあったはずである。このことは、さきのノワンテル侯爵宛の科尔ベール書簡にも、言語教育とともに「ローマ教皇のカトリック教」がしっかり教授されるべきと明記されていることから窺えよう。

## 2. ルイ=ル=グラン学院の言語少年

この時期、中東地域での活動は、政治と宗教を切り離して考えることはできなかった。実際、イギリスもこの地における宗教の重要性には早くから気づいていたようで、オックスフォードに東方プロテスタントのための神学校を1690年に開設している。じつは、イエズス会は、1623年以來、トルコのイズミルに宣教支部を置き、ささやかながらチャペルと学校を有していた。1688年7月には大地震に見舞われるが、時のフランス大使ピエール・ド・ジラルダン (Pierre de Girardin, 在職1685-89) の努力もあって、マルセイユ商業組合の費用で教会が再建され、神学校も設置された。目的はもちろん、新しい宣教師を養成し、東方の言語と教説を学ばせ、教会の顕職を果たせるようにすることである。

さて、イギリスがオックスフォードにこの機関をつくったことで、1692年、フランスとのあいだに興味深い「事件」が起きている。イエズス会がイズミルで教育していた生徒を勧誘し、オックスフォードに送るという事態が生じたのである。いわば生徒の奪い合いである。イエズス会のイズミル神学校の生徒は当時6名であったが、このうち3名がイギリス人に「掠われ」、オックスフォードへと送られた。この事態を重くみた



ド・レシユス (De Ressius) と J.-X. ポルティエ (Portier) という神父は、同年、イギリス人がイズミルの自分たちの学校をまねてオックスフォードにつくったような施設をマルセイユにもつくり、ギリシャ人、シリア人、アルメニア人の子どもにカトリック教育を施すように政府に進言している<sup>12)</sup>。ようやく九年戦争が終結したのをまって、イエズス会はふたたび国王に建白書を出し (1698年11月11日)、その後も弛まず要請を続けた結果、1700年、国王もやっと要求を受け入れる。

こうしたなされた1700年の改定は、1669年の制度を補完するものであったが、進言されたマルセイユに教育施設を作るのではなく、イエズス会よって運営されていたパリのルイ=ル=グラン学院 (Collège Louis-le-Grand) に、12人分の給費制度が導入され、同人数のアルメニア人少年を受け入れて、レヴァント地域の宣教師を助ける目的で宗教教育がおこなわれるようにするというものであった。では、実情はどのようなものであったのだろうか。F. マソンの記述にしたがって一例をみてみよう。

1705年の状況を見ると、パリに来て教育を受けていた若き東洋人は10名で、その内訳は、ギリシャ人7名、アルメニア人3名。1700年6月16日に5名がパリに到着<sup>13)</sup>、同年12月20日にはさらに2人が到着する<sup>14)</sup>。1702年に1名が、さらに翌年に2名が加わった<sup>15)</sup>。このなかで最年長は23歳、最年少は14歳であった<sup>16)</sup>。かれらはトルコ風の衣服をまとい、幅広いズボンを腰のところでベルトで締め、短めの上着、ピーコートのような大きなマント、頭にはトルコ帽のような縁なしで上部が平らになった帽子を被っていた<sup>17)</sup>。

12) Frédéric Masson, *op. cit.*, p. 74.

13) この5名の名前は、Lomaca, Justiniani, Javigy, Righo, Missirliである。

14) それぞれ Abdallah, Jarrati という名。

15) 順に Georges Méclainsm Jean-Baptiste Yankoski, Pierre-Xavier Barré。以上は Frédéric Masson, *op. cit.* による (p. 76)。

16) Cf. Frédéric Masson, *op. cit.*, p. 76.

17) *Ibid.*, pp. 76-77.

さて、このパリでの養成教育は成功しただろうか。じつは最初からその結果はとても成功といえるものではなかった。さきに挙げた10名を含む12名のその後は、2名がルイ＝ル＝グラン学院で死亡、1名が体を患って帰還、1名が目の炎症で退学、2名がついに学院生活に馴染むことができずに退学要請。それ以外の者は、1名がイエズス会員になり、1名が修道会に入り、4名がただ単に帰国したのみであった。言語青年としてコンスタンチノーブルのカプチン修道会の学校に入ったのは、ただ1名のみ<sup>18)</sup>。一人あたり年間600リーヴルかかる割には惨憺たる成果というほかない。10代の少年にとって、何から何まで異なる環境を強いられるのは、まさに流刑に等しかった。いまから300年前のパリとオスマン・トルコの首都のあいだの文化的差異は、若い東洋人にとっては乗り越えがたいものであり、いくら国家の政策によって呼び寄せられた生徒であるとしても、フランス人側に東方の文化やかれらの習慣を理解しようとする者はほとんどいなかった。パリの人びとがアラビア語やオリエント世界についていかに無知であったかは、まさしくこの時期『千夜一夜物語』をフランス語に翻訳していたアントワヌ・ガランの日記に綴られている興味深いエピソードにも示されている<sup>19)</sup>。いずれにしても、こうした環

---

18) *Ibid.*, pp. 77-78.

19) 1709年月6月1日(土)の日記は以下のとおり。「昼食後、マロン派キリスト教徒ハンナがこんなことをわたしに教えた。3日前、すなわち5月30日の聖体顯示の日、サン＝ミシエルの船着き場に面した部屋からノートル＝ダム大聖堂の聖体行列を見ていたおり、天蓋の上部を覆っていた赤い繻子、おそらくは戦時にトルコ人から、あるいは北アフリカの人びとの船舶から略奪したものにちがいない旗から切り出されてノートル＝ダムにもたらされたこの布に、白い文字でマホメット教徒の信仰証言が書かれているのに気づいたというのだ。すなわち『神(アッラー)以外に真の神はなく、ムハンマドはその予言者なり』(*La ela ella llah Mohammed rasoul llah*)と。ハンナはその日のうちに、このことを枢機卿下付貴族、騎士章佩用者モニエ氏に話し、猊下に知らせてこの繻子を取り外す命を出させようとした。

6月6日、わたしはハンナから、かれの意見にしたがって、聖体行列に使われ

境のなかで東洋の若者を教育するには限界があった。

以上のような状況をうけて、ルイ14世の死後、摂政政府はいくつかの制度変更を加えていく。まず1718年6月7日の決定によって、コンスタンチノーブルで生活する生徒数は12名と決められ、年間に支給する寄宿費を350リーヴル（衣服代は別途一括して120リーヴルを支給）として、これをマルセイユの商業組合に払わせる仕組みとした。結局、イズミルのほうは実現されず、コンスタンチノーブルでもそのプログラムはじゅうぶんなものではなく、言語についてはトルコ語のみで、アラビア語もペルシャ語も無視された。すでに見たとおり、1700年から12名の近東諸国の若者をパリのルイ＝ル＝グラン学院に呼び寄せ、通訳業務とカトリック伝道というふたつの任務を負う人材を育成しようとしていたが（ほとんどはギリシャ人とアルメニア人）、国家利害に関わる交渉に外国人を使うことは、不幸な結果に終わることも多い。そこで、ルイ15世は1721年7月20日の決定で、従来の制度のなかで重要な位置を占めていた宣教師養成の目的を縮減し、純粋に実務的通訳の養成へと制度をさらに変更した。ルイ＝ル＝グラン学院の受け入れ対象がアルメニア人（もしくはギリシャ人）からフランス人となり、人数枠も12名から10名へと削減された。しかも、受け入れられる若いフランス人は、フランス在住のフランス人家庭の子どもと、レヴァント地域に居住する通訳、商人もしくはその他

---

るノートル＝ダムの天蓋の上部を覆うこの繻子を取り去られ燃やされたこと、そして、この布がじつは40年も前から使われていたことを聞いた。」(Antoine Galland, *Journal parisien d'Antoine Galland (1708-1715), précédé de son autobiographie (1646-1715)*, éd. H. A. Omont, Paris, 1919, p. 47.)

18世紀初頭のパリで、数十年ものあいだアラビア語の文字がだれにも理解されなかったとは考えにくく、おそらくこの話は事実ではない (Cf. Nicholas Dew, *Orientalism in Louis XIV's France*, Oxford University Press, 2009, pp. 2-3)。にもかかわらずこんなエピソードが語られるのは、当時の人びとがアラビア世界の知識に乏しかったからであり、ガランはそのことを皮肉まじりにこうした作り話に変えたのだろう（もちろん、みずからの東洋語の知識を自負する意図もあっただろうが）。

のフランス人家庭の子どもから交互に選ばれることになった。年齢も8歳前後に引き下げられた。そして、ラテン語とトルコ語、アラビア語の教育を受け、修辞学を終えてのち、コンスタンチノーブルのカプチン修道会のもとに送られて、さらに言葉に磨きをかける<sup>20)</sup>。したがって、コンスタンチノーブルの学校はいわば応用実践の学校であり、ここを出るとともに通詞としての任務を果たせるようになっていなければならない<sup>21)</sup>。

なぜこのような制度変更が行われたのか。それはまず、フランス国家への忠誠度である。当時の報告書には、「外国で生まれることによってしばしば弱体化する通訳の愛国心 (patriotisme des interprètes)」<sup>22)</sup> が問題となっていること、一方で、フランス生まれは、ラテン語はいいとしても、東方語の進歩がいまひとつであること、したがって、レヴァント地方で通詞の家庭の子どもとして生まれたものに配慮すべき、との意見も見いだせる<sup>23)</sup>。いずれにしても、1721年の決定は、キリスト教の旗印のもとに東方を支配するという、かつてルイ14世が抱いていた壮大な野望を捨てた結果であった。カトリシズムへの勧誘という任務はほとんど放棄されたが、ラテン語、古代ギリシャ語、トルコ語、アラビア語が教授され、教育自体はイエズス会がおこなっていたということもあり、その配慮から古典学も重視された（イエズス会士は総じてよき教師であった）。1721年から1762年（この年にイエズス会士は追放される）までが、言語少年学校のもっとも繁栄した時期である。

1762年以降の運命を簡単に記しておく、大学（イエズス会と大学と

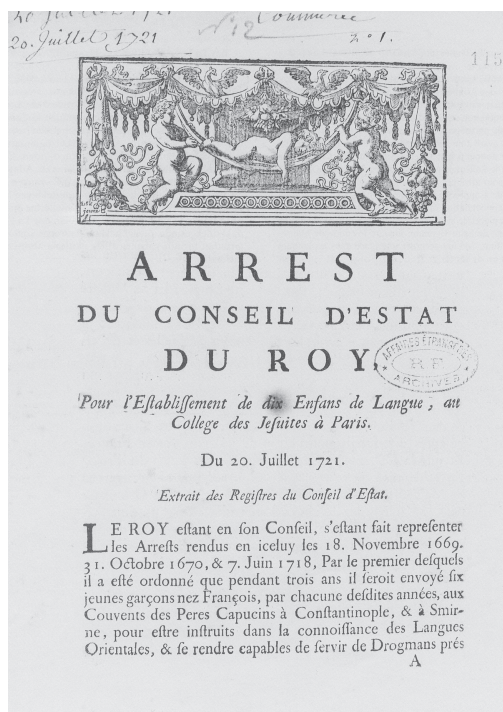
---

20) Henri Cordier, *op. cit.*, p. 271.

21) Frédéric Masson, *op. cit.*, p. 81.

22) Charles Schefer, *Mémoires sur l'ambassade de France en Turquie, 1525-1770 par François Emmanuel Guignard, 1735-1821, Comte de Saint-Priest, Ambassadeur de France en Constantinople, suivis du Mémoire sur le Commerce des Français dans le Levant*, Philo Press, Amsterdam, 1974 (réimpression de l'édition de Paris 1877), p. 310.

23) *Ibid.*



1721年の勅令：Enfants de langue et Drogmans (Catalogue de l'exposition « Enfants de langue et drogmans»), Yapi Kredi Yayinlari, Istanbul, 1995より。

の長い対立のあと、ルイ＝ル＝グラン学院は1763年からパリ大学の管轄下にあった)もイエズス会によって教育された生徒たちのやる気のなさに困惑したが、とくにこの言語青年学校を再編しようとはしなかった。1763年にペルシャ語教育が開始されるなど、いくつかの新しい試みはあったものの、教育水準と生徒の質は落ちる一方で、旧体制末期にはついに閉鎖が取りざたされるようになった。

革命はすべての王立施設を閉鎖したが、ルイ＝ル＝グラン学院だけは大目にみられ、平等学院 (Collège Égalité) という名になって存続し、他方

でさきに触れた国立東洋語学校も創設された。言語青年学校は、平等学院の奨学生部門となり、1792年には生徒数4名を数えるのみ。平等学院から中央学校 (École centrale) へ、さらにナポレオン時代にはプリユタネイオン (幼年学校、Prytanée)、そして帝立高校 (Lycée impérial) と名前を変えるルイ=ル=グラン学院とともに運命をともにする。

王政復古以降は、ふたたび「ルイ=ル=グラン」という名に戻った同校に併設されまゝ、「東洋語学校」(École des Langues orientales) という名称でなんとか存続し続ける (革命期に設立された国立東洋語学校とは別)。1868年、理由のほどはわからないが、ラピエール (Lapierre) の下、「言語少年学校」(École des Jeunes de Langues) という名前が復活。1877年、トルコ学者のパヴェ・ド・クルテイユ (Pavet de Courteille) が教授となり、1883年、ラピエールに代わって校長となった。そして、1893年以降、公式文書がこの学校名前は消える。その後は、「Jeunes de Langues」という名詞は外務省から奨学金を受けて学ぶ同省通訳官の息子たちを指す言葉として残ったが、かれらはリール街の国立東洋語学校 (École spéciale des Langues orientales) で学ぶように強制されることになった。

### 3. 言語少年をとりまく18世紀東洋語事情

フランソワ1世の時代からフランスはオスマン・トルコと外交関係を結んでいたが、トルコ語に関心をもちはじめたのは17世紀になってからである。目的は、まずキリスト教布教、ついで通商上の拡大である。コルベールの呼びかけもあって、東方語の研究はしだいに組織化されていくようになる。当初は個人的なものにとどまっていたオリエントの手稿収集も、言語少年学校創設の決定が出された1669年には王立図書館 (Bibliothèque royale) に収蔵すべく公式になされるようになった。こうして集められた文書をもとに、翻訳をはじめ、文法書や辞書の編纂も活発になっていく。

こうした状況のなか、フランスの言語少年学校の教育のありかたについてもいくつかの提案がなされている。たとえば、1719年に在オスマン

帝国フランス国王大使であったボナック侯爵 (marquis de Bonnac)<sup>24)</sup> は海事評議会 (Conseil de marine)<sup>25)</sup> に対して書簡を送り (8月24日付)、「フランス語とトルコ語文法書、そして辞書を使って勉強させることは絶対に必要でしょう。これがないために、教育しているほとんどの言語少年 (Enfants de Langue) は習慣からのみトルコ語を知り、話すことも書くこともまったく不完全にしかできないフランス語をほとんど忘れていきます。」<sup>26)</sup> と述べ、当時あったメニンスキ (Meninski) の辞書<sup>27)</sup> はラテン語もイタリア語も知らない彼らには無意味であるうえに、入手困難であること、したがって早急に適切な文法書と辞書を作成する必要があることを力説している。これを受けて11月13日には、こうした著作の編纂できる人材を探そうウセーブ・ルノド師 (Abbé Eusèbe Rounodot, 1648-

24) ジャン＝ルイ・デュソン・ド・ボナック (Jean-Louis d'Usson de Bonnac, 1672-1738) はフランスの外交官。1711年から13にかけてマドリード、1716年から1726年までコンスタンチノーブル、1726年から33年までスイスで大使を務めた。

25) いわゆる多元会議制 (polysynodie) を構成する評議会のひとつ。摂政時代とともにフィリップ＝ドルレアンによって立ち上げられた多元会議制そのものは約3年 (1715年～1718年) で廃止にいたるが、評議会はかたちを変えて存続していた。

26) Le Marquis de Bonnac (lettre du 24 août 1719 adressée au Conseil), reproduite dans les « Documents sur les Jeunes de Langues et l'Imprimerie orientale à Paris en 1719 », tirage à part du *Bulletin de la Société de l'Histoire de Paris et de l'Ile-de-France*, juillet-août 1890, publié par H. Omont, imprimerie Daupéley-Gouverneur, p. 3. なお、文献によって Bonnac は Bonac と綴られる。

27) 1680年から1687年にかけてウィーンで出版された *Thesaurus linguarum orientalium* (3 vol.) を指す。メニンスキ (1623-1698) はフランス生まれの著名な東洋学者で (フランス名は Mesgnien)、ポーランドの大使のもとでコンスタンチノーブルに赴き、そこでトルコ語を習得した。その後、在オスマン・トルコ帝国ポーランド大使館首席通訳に任命された。さらにウィーンで神聖ローマ帝国皇帝レオポルド1世に首席通訳として仕え、この街で没した。上記の辞書は第四巻目に文法書、第五巻目に補遺として固有名詞辞典がついていた。いずれにしても、この辞書が出るまではトルコ語の辞書はなく、ヨーロッパの東洋学史上重要な位置を占める。



1729) に時の海軍元帥と海事評議会議長が連名で手紙を書き送る<sup>28)</sup>。その結果、ルノド師によって「言語少年の教育のために提案される著作に関する海事評議会への意見書」(*Mémoire pour le Conseil de la Marine sur les ouvrages proposez pour l'instruction des Enfants de Langue*) が作成された<sup>29)</sup>。この意見書は、通訳養成について当時どのように考えられていたかを知るのに重要であると思われるので、要点を紹介してみよう。

このなかで 現地の言語青年学校の現状について、二つの側面から不備が指摘されている。まず、教師がすべてカプチン修道僧であること。ルノドが言うには、たしかにカプチン僧が生徒たちの教育と日常生活の世話をしてくれていることは称讃されてしかるべきだが、そもそも修道僧たちは現地に住むフランス人キリスト教徒やヨーロッパ人の教育のため、そして説教・告解のために赴いたのであって、現地の言葉を専門的に勉強しているわけではない。場合によっては、東方のキリスト教に関する書物の知識もきわめて貧しい。したがって、自分の知らないことは教えないし、自分たちに都合よくないことももちろん教えない。さらに、修道僧たちは少しばかり言語が使えるようになると、悪文で書物を著したりするため、とくにアラビア語については、言語少年たちにとって必要不可欠な言語であるにもかかわらず、学習がきわめて不完全なものに終わる。現地トルコ人を教師に雇うという方法もあり、実際に成功した例がないわけではない。しかし、青年たちに雇うだけの金銭的余裕がないのが普通で、かりに雇ったとしても言語少年たちに必要な実務的アラビア語教育には必ずしも向いていなかった。

したがって、もっとも重要なのは文法書と辞書を整備することである。

28) « Documents sur les Jeunes de Langues... », *op. cit.*, pp. 4-5.

29) ルノドの手稿はパリ国立図書館にあり (*Bibliothèque nationale, collection Renaudot, vol.32*)、10葉からなっている (fol. 513-522)。この「意見書」はただちに海事評議会記録簿に書き写された (*Registre du Conseil de marine, Archives de la marine, B<sup>1</sup> 37, fol. 436 v<sup>o</sup>-453v<sup>o</sup>*)。印刷テキストは « Documents sur les Jeunes de Langues... », *op. cit.*, pp. 5-13。



ルノドの最終的な提案は、ヨーロッパにはすでに文法書が存在していることを踏まえ、最良のものを再版することであった。たとえばアラビア語に関しては、「エルベニウスの小文法<sup>30)</sup> は言語の諸原理に関するすべてのことが含まれていますから、これを再版して大使閣下に部数を送り、言語少年に配布してもらっただけでもよろしいでしょう。』<sup>31)</sup> といい、グラウウィウスのペルシャ語文法、デュ・リエやシーマンのトルコ語文法などを挙げている<sup>32)</sup>。

辞書は非常に高価でもあり、文法書よりも深刻で、ルノドによれば言語少年はまったくといっていいほど所有していなかったようだ。例に漏れず、ゴリウスの辞書<sup>33)</sup> も大部分がオリエント地域で出版されていた辞書の記述を借用して編纂したもので、彼らにとってはきわめて使い勝手が悪く、とうてい実用的とはいえなかった。そこで持ち出されているのがメニンスキの辞書の新版を出すという案である。この辞書は主要3カ国語（トルコ語、アラビア語、ペルシャ語）を含む辞書であり、通訳養成にはもっとも適していたからである。まったく新しい辞書を編纂するとなるとたいへんな時間と労力を要するため、メニンスキの辞書をモデルにアラビア語、ペルシャ語、トルコ語の3カ国語辞典をつくるという

---

30) トマス・エルベニウス (Thomas Van Erpe / Thomas Erpenius, 1584-1624) はネーデルラントの東洋学者。とくにアラビア語の権威として17世紀にはヨーロッパ中に名の知れた存在であった。アラビア語の活字を彫らせ、自宅に印刷所をもった。ライデン大学でも教鞭をとり、いくつかの著作を出したが、死後もかれの名を冠する文法書や辞書が数多く書かれ出版されている。

31) « Documents sur les Jeunes de Langues... », *op. cit.*, p. 7.

32) Johannes Gravius, *Elementa linguae Persicae*, 1649 ; André du Ryer, *Rudimenta grammatices linguae Turcicae*, 1630 ; William Seaman, *Gramatica linguae Turcicae*, 1670.

33) Jacobus Golius (Jacob van Gool), *Lexicon arabico-latinum*, 1653。J. ゴリウス (1596-1667) はネーデルラントの東洋学者で、エルベニウスの教え子であるとともに後継者とも言うべき人物。もともと学問を志したこともあり、デカルトとも親交があった。

のがもっとも合理的と判断したようである<sup>34)</sup>。

以上はほんの一例だが、いずれにしてもこうした機運が18世紀を通じて沈滞していた東洋学のその後の進展に寄与したことは相違なく、言語の専門家でありオリエントの文明の最先端を知っていた通詞たちも、当然のことながらこの「東洋の発見」の一翼を担うことになる。

#### 4. 東方通詞の生活

では、かれら通詞たちの仕事の内容はどのようなものであったのだろうか。いくつかの資料から、その仕事内容とかれらが置かれていた状況について記述してみよう。

まず、派遣されてくる大使や領事がまったくといってよいほど現地の言葉や文化に理解がなかったという前提がある。口頭でせよ文書にせよ、かれらはトルコ語やアラビア語を基本的に解さなかった。

到着すると、かれらは大公あるいは総督の謁見を願い出てその機会を得る。この最初のまったく儀礼的な訪問が済んでしまうと、大使も領事ももう姿をあらわさない、その国の滞在がとれほど長引こうとも、またどんな事象が起きようとも、絶対にあらわさないのだ。

ここでは事はすべて、俗に *Drogman* (通詞) と呼ばれ、ルイ14世によって設立された、ルイ=ル=グラン学院にある言語少年学校出の通詞によって対処されている。これはもっとも有用な、しかももっとも給料

---

34) « Documents sur les Jeunes de Langues... », *op. cit.*, pp. 9-10. ルノドのもう一つの重要な提案は、こうした辞書や文法書を出版するために東洋語の印刷所を再興するということであった。フランスにおける本格的な東洋語(アラビア文字)印刷は17世紀、サヴァリ・ド・ブレーヴ(François Savary de Brèves, 1560-1628)の帰国とともに始まり、ド・ブレーヴ自身の目的もまた辞書をつくることにあったが、東洋語印刷の歴史は、これまた大きなテーマなのでここで言及する余裕はない。

の低い係官で、仕事の重みを一身に引き受けている<sup>35)</sup>。

実際に現地の代表に対する提案や要求は、すべて通詞をとおしてなされていたのであり、通詞なしにはまったく大使や領事の任務はつとまらなかつた。大使や領事に傳くだけでなく、相手国の大使がフランスに赴く際にも同行するのはかれらであつたし、ナポレオンのエジプト遠征のときのように、軍の一員として動員されることもあつた。かれらに求められた資質は、まず母国の言語をよく知っていること、諸々の辞書やラテン語訳された東方の著作を活用できるほどにラテン語の知識があること、イタリア語、現代ギリシャ語、トルコ語、アラビア語、ペルシャ語で作文し、翻訳できる程度に知っていることであつた。さらに、地元権力者の全般的利害、通商の原則、歴史と地理、とくにトルコの法律と習慣、行政的手続き形式などの知識も必須であつた<sup>36)</sup>。

このような重責を負いながらも、さきにも触れたとおり、その待遇はけっしてよいものとはいへなかつた。給料が低かつたことに加え、何よりもかれらが不満だつたのは、通詞と領事はまったく異なる身分であり、この差は越えることができないという事実であつた。スウェーデンやオーストリアの場合とちがって、いくら優秀な通詞であつても、領事や大使には原則としてなれないのである<sup>37)</sup>。

さらに私生活においても、領事とのあいだに感情的対立が絶えなかつた。多くの寄港地では通詞は領事の家で生活し、そこで食事をするのが通常であつた。上下関係からして通詞は領事に絶対的に服従しなければならない。しかし、言葉や習慣を知り尽くし、長年にわたつて現地の権力者とも人間関係を構築している通詞たちにとって、現地の言葉も慣習

35) « Nécessité d'encourager en France l'étude des Langues Orientales ... », in Henri Cordier, *op. cit.*, p. 284.

36) *Enfants de langue et Drogmans* (Catalogue de l'exposition « Enfants de langue et drogmens»), Yapi Kredi Yayinlari, Istanbul, 1995, p. 82.

37) *Ibid.*, p. 84.

もほとんど知らない領事から下される命令に対して意見しなければならぬこともしばしばあった。したがって、両者の関係はほとんどの場合、険悪なものとなる<sup>38)</sup>。こうした日常の精神的苦痛に加えて、この地域には、フランスとはちがって地震から疫病まで、さまざまな身体的危険があった。ペストで命を落とした通詞もいるし、天然痘や赤痢に悩まされることもしばしばである。政治的対立のあいだに立つ身である以上、トルコ政府からの糾弾に直面するのはかれらであり、ときにはスパイの嫌疑をかけられて処刑されることもあった。

したがって、かれらはけっして満足してこの仕事をしていただけではなく、機会があれば職を離れてフランスに戻りたいと願っているものがほとんどであった。

最後に、かれらが放つ異文化の香り、エキゾティシズムの源泉のひとつもなったであろう衣装に簡単に触れておきたい。おそらくかれらは、その衣装において当時のヨーロッパで異彩を放っていたと思われ、風俗文化という点からみても重要だと思われるからである。

オスマン・トルコでは長いあいだ、衣服によってどの宗教コミュニティに属しているかがわかるようになっていた。当然のことながら、東方の通詞たちもその規則に従わなければならなかった。かれらのもっとも伝統的な服装は、サテンの上着に貂（黒貂）の毛皮で裏打ちされた深紅のローブを着、カルパク (kalpak) と呼ばれる美しい毛皮のボンネットを被っていた<sup>39)</sup>。ローブは青のことも多かった。たとえば1684年10月28日にフランス大使ギユラグ (Guillelagues) がトルコの大臣に拝謁したとき、「どの通詞も下に赤いサテンを、上からイギリス産の青い毛織物を着

---

38) « Mémoire sur les Drogmans » (Mémoire de Luc Fonton, daté du 10 décembre 1778), in Henri Cordier, *op. cit.*, p. 277; *Enfants de langue et Drogmans* (Catalogue de l'exposition « Enfants de langue et drogmens»), *op. cit.*, p. 83.

39) *Enfants de langue et Drogmans* (Catalogue de l'exposition « Enfants de langue et drogmens»), *op. cit.*, 1995, p. 53.



東方通詞の衣装 : *Costumes orientaux inédits dessinés d'après nature en 1796, 1797, 1802, et 1809, par Manzoni, Paris, 1813*

て、各々が白いスカーフをしていた」<sup>40)</sup>という。通詞はみな黄色のバブーシュを履いていたが、17世紀末、この色はトルコ人と近東諸国のヨーロッパ人にのみ許された色で、アルメニア人は赤を、ギリシャ人は紫を、ユダヤ人は黒を履いていたらしい<sup>41)</sup>。

しかし、通詞の衣装が正式に規定によって決められたのは18世紀末に発令された王令（1781年3月3日）で、その第93条、94条に通詞の衣装の役割と条件にかかわる定めがある。それによれば、レヴァント港の通詞は東洋風の衣服かフランス式衣服のいずれを身につけることができるが、ひとつの寄港地の通詞はみな同じ衣服を着けなければならない。どちらかの衣服を選択する際、かれらのあいだでもし争いが生じたら、コ

40) *Ibid.*, p. 53.

41) *Ibid.*, p. 54.

ンスタンチノーブルでは大使が、他の寄港地では領事と副領事がそれを一時的に決めることになる<sup>42)</sup>。この条項の意図は、フランスに仕える通詞にはフランス式衣装を着せるというところにあったから、この衣装についてはそのスタイルや色、ボタンにいたるまで厳密に決められた。もっとも、このような規定ができて、新しい制服を買うのは自費であったから、通詞たちがこぞってフランス式に更衣したわけではない。東洋風の衣装を脱ぐように命じられるのは、ナポレオン時代の1806年になってからである。

ところで、通詞たちが自分たちの衣服にこだわりをもっていたことは疑えない。衣装はかれらにとって、おそらく職業的シンボルであり、国籍や仕える国を超えて、ひとつの職業集団のアイデンティティと凝集力ともなっていたにちがいない。したがって、19世紀にはいっても、かれらは東洋風の衣装を捨てることはなかなかしなかったようである。

\* \* \*

言語少年とよばれた通訳の伝統は、19世紀を通じてしだいに人びとの記憶から薄れていく。しかし、東方世界での通訳の仕事自体は、じつは19世紀になって人びとの目に目立って飛び込んでくるようになる。政府によって制度的に育成された通詞たちは、大使館や領事館での公職に携わる役人であったが、19世紀はよく知られているように、文学者や旅行家を含め、多くの一般ヨーロッパ人がオリエント世界に出かけるようになり、その人たちに通訳は不可欠なものとなっていったからである。おそらくその嚆矢となったのは、シャトーブリアンの『パリからエルサレムへの旅』*Itinéraire de Paris à Jérusalem* (1811) であろう。この作品は大反響を呼び、ロマン主義的旅愁の水脈のひとつとなったといってもよく、幾度も版を重ねた。19世紀以降のオリエントの旅のモデルがこの作品

---

42) *Ibid.*, p. 54.

によって決定されたといってもいいすぎではないほど、影響力は大きかった。18世紀末から急速に関心呼び始めた古代ギリシャ文明の跡、聖地エルサレム、そしてナポレオン遠征によって新たな生命を吹き込まれたエジプト — シャトーブリアンが描いたこのルートは、ほぼ一世紀半にわたって旅程のスタンダードとなるのである。とはいえ、いずれの地域も19世紀の初め、オスマン・トルコの支配下にあった地域である。したがって、通詞の存在なくしては、旅行自体が不可能であっただろう。たとえば、イズミルに向かう船で思い出のひとつとして、シャトーブリアンは一人の通詞のことをこう書いている、「ジョゼフは、甲板でわたしの傍らに立ち、進むにしたがってわたしが見るものをすべて名指してくれるのだった」<sup>43)</sup>。すべては場所を名指すことから始まるのだとすれば、旅行者の記憶と記録のはじまりにはつねに通詞の存在があったことになる。ある研究によれば、19世紀前半におけるフランス語による東方旅行記の約3分の2が通詞について言及しているという<sup>44)</sup>。

シャトーブリアン、フローベール、ゴーティエ、ネルヴァル……。熱に浮かされたように東方を目指した文学者たちの水先案内であった通詞の存在は、もう少し光が当てられてしかるべきではないだろうか<sup>45)</sup>。

(本学教授)

(本研究は平成23年度日本学術振興会科学研究費補助金〔課題番号：21652033〕による成果の一部である。)

43) François-René de Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem*, Paris, 1806, t. 1, p. 283.

44) Daniel Panzac, « Les drogmans pour voyageurs dans l'Orient du XIXe siècle », in Frédéric Hitzel (éd.), *Istanbul et les langues orientales*, L'Harmattan, 1997, p. 453. なお、おもしろいことに、フランスの旅行記作品とは逆に、イギリスの旅行記には通訳への言及が少ないという。

45) 作品のなかでの通訳については、稿を改めたい。